



第二中学校だより

「明るい挨拶 光る汗 きれいな学校 きれいな心」

<http://www.c-niiza.ed.jp/j-daini/>

一人ひとりがいじめと向き合う

校長 伊藤 進

5月11日の学校公開、部活動保護者会には多数の地域や保護者の方にご来校いただきありがとうございます。中間テスト前には友だち同士で問題を出し合いながら登校する生徒、質問教室に積極的に参加する生徒が多くいました。テストは最後まで粘り強く行うことが大切です。学力の向上とともに確かな人格形成を育む為にも、様々な教育活動を通して、こうした力を育てていきたいと考えています。

5月30日の全校朝会では、「いじめ」について話しました。以前、新聞に掲載された記事を紹介します。

『広い海へ出てみよう』

東京海洋大客員助教授・さかなクン

中1のとき、吹奏楽部で一緒だった友人と、だれも口を聞かなくなったときがありました。いばっていた先輩が3年になったとたん、無視されたこともありました。突然のことで、わけはわかりませんでした。

でも、魚の世界と似ていました。たとえばメジナは海の中で仲良く群れて泳いでいます。ところが、せまい水槽と一緒に入れたら、1匹を仲間はずれにして攻撃し始めたのです。ケガしてかわいそうなので、その魚を別の水槽に入れました。すると残ったメジナは別の1匹をいじめ始めました。助け出しても、また次のいじめられっ子が出てきます。いじめっ子を水槽から出しても新たないじめっ子が現れます。広い海の中ならこんなことはないのに、小さな世界に閉じこめると、なぜかいじめが始まるのです。同じ場所に住み、同じエサを食べる、同じ種類同士です。中学時代のいじめも、小さな部活動でおきました。ぼくは、いじめる子たちに「なんで？」と聞けませんでした。でも仲間はずれにされた子と、よく魚つりに行きました。学校から離れて、海岸で一緒に糸をたれているだけで、その子はホッとした表情になっていました。

話を聞いてあげたり、励ましたりできなかったけれど、誰かが隣にいただけで安心できたのかもしれない。ぼくは変わりものですが、大自然のなか、魚に夢中になっていたら嫌なことも忘れます。大切な友だちができる時期、小さなカゴの中でだれかをいじめたり、悩んでいたとしても楽しい思い出は残りません。外には楽しいことがたくさんあるのもったいないですよ。広い空の下、広い海へ出てみましょう。

(朝日新聞2006年12月2日掲載)

この話は、魚の群れの話ですが、さかなクンが洞察するように、第二中でも、同じことが当てはまることが考えられます。いじめは「人間として絶対に許されない、人権に関わる重大な問題」です。しかし「いじめ」はいけないと教育すればなくなるかという、そんな簡単なものではありません。「いじめ」はあるかないかという二択ではなく、些細なことから徐々に進行します。



いじめは、人が2人以上いれば起きる可能性があり、学校には「いじめ」の芽は常にあると思います。いじめの芽がでたら早期発見、早期に適切に対応することが重要です。規則や罰則、厳しい指導で一時的に「いじめ」をなくしても、より見えない場所で巧妙な手口で深刻な「いじめ」が発生することがあります。

心の内面から「いじめ」をしない、させない、見て見ぬふりをしないなどの心を育てることが大切です。被害者や加害者に自分を置き換えてみる。一人ひとりが「いじめ」に向かい合う、傍観者にならず、いじめ解消に向かい行動を起こすことができる生徒の育成に今後も取り組んでいきます。

